

Title	「名前のない感情」の社会学のために (I) : アートベース・リサーチと「感情公共性」の空間へ
Sub Title	A sociology of "unnamed emotions" : with arts-based research and public sphere of lived emotions
Author	澤田, 唯人(Sawada, Tadato)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2025
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.154 (2025. 3) ,p.95- 113
JaLC DOI	
Abstract	This paper explores a sociological approach to qualitatively understanding “unnamed emotions.” Constructivist approaches in the sociology of emotions have traditionally posited that emotions are experienced when individuals label their feelings with socially appropriate emotion words within a given social context. However, people often struggle to identify their emotions, or they may express emotions that do not align with the labels assigned to them—for instance, shedding tears despite not feeling sad. These “unnamed emotions,” embodied and lived in ways that remain inexplicable even to those experiencing them, have not been sufficiently addressed in the sociology of emotions. However, sociologist Masayuki Okahara’s concept of a “public sphere of lived emotions,” which seeks to create spaces where individuals can witness and share lived emotions, along with his introduction of “art-based research,” provides a framework for respecting the voices of unnamed emotions and listening to them as valid narratives. This approach fosters a space where emotions can be expressed and understood without naming. Through art, unnamed emotions can be conveyed and embraced as irreplaceable experiences, offering a new direction for the sociology of emotions.
Notes	特集：岡原正幸君・岡田あおい君・三尾裕子君退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000154-0095

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「名前のない感情」の 社会学のために（Ⅰ）

——アートベース・リサーチと
「感情公共性」の空間へ——

——澤 田 唯 人*——

A Sociology of “Unnamed Emotions”: With Arts-Based Research and Public Sphere of Lived Emotions

Tadato Sawada

This paper explores a sociological approach to qualitatively understanding “unnamed emotions.” Constructivist approaches in the sociology of emotions have traditionally posited that emotions are experienced when individuals label their feelings with socially appropriate emotion words within a given social context. However, people often struggle to identify their emotions, or they may express emotions that do not align with the labels assigned to them—for instance, shedding tears despite not feeling sad. These “unnamed emotions,” embodied and lived in ways that remain inexplicable even to those experiencing them, have not been sufficiently addressed in the sociology of emotions. However, sociologist Masayuki Okahara’s concept of a “public sphere of lived emotions,” which seeks to create spaces where individuals can witness and share lived emotions, along with his introduction of “art-based research,” provides a framework for respecting the voices of unnamed emotions and listening to them as valid narratives. This approach fosters a space where emotions can be expressed and understood without naming. Through art, unnamed emotions can be conveyed and embraced as irreplaceable experiences, offering a new direction for the sociology of emotions.

* 大妻女子大学共生社会文化研究所特別研究員，慶應義塾大学文学部非常勤講師

1. はじめに

感情と話せたら、どれだけよかったですろう。感情の〈ことば〉がわかれば、どれほどよかったですろう。どうしてあのとき私は泣いたのだろう。どうしてあの日、身体が動かなかったのだろう。どうしてあの日、あなたは命を絶ったのだろう。感情と話せたら、どれだけよかったですろう。

感情の〈声／ことば〉を聴くことは可能だろうか。本稿がこのような問いに導かれるのは、感情社会学に新たに導入された「アート」を用いる質的調査の方法論——「アートベース・リサーチ（Arts-Based Research：以下、ABR）」——の存在がある（岡原 2020）。それまでの構築主義的な感情理解から、アートを用いることでしか把握し得ないものへと人間の「生きられた感情」が捉え直されることは、ひるがえって、私たちが感情を日々生きることにもまた日常的な言語実践の平面には還元し得ない、それ独自の意味（ことば）の地平が生きられて存在することを暗黙の裡に告げているからである。

その限りでは、感情社会学はこれまで、感情の「社会性」を見誤ってきたといえる。つまり、感情の社会性を、主体の意識的な言語実践の水準でなされる感情の構築性のみ認め、感情それ自体が人間の身体を通じて生きようとする社会性の水準を認めてこなかった。感情ほど私たちをふりまわし、何かをさせたり、できなくさせたりするものはない。それは自分でも気づかないままに言動に現れることもあるし、それを自覚してもなお、なぜそうしてしまうのかわからないまま繰り返してしまうこともある（宮下 2016）。目的合理的でも価値合理的でもなく、規範的でも慣習的な行為でもなく、何かに取り憑かれたようにそうせざるを得ないかたちで、しかし無意味でも無思慮な反応でもなく、感情それ自体が主体の身体を通じて何事かを語ろうとするように生きようとする。そのような感情それ自体の

社会性——〈ことば〉の地平——がある。

もちろん、この感情の〈ことば〉は、先のひとつめの感情の社会性（＝構築性）の次元では「感情語」をラベリングされる対象でもある。私たちは、社会的に分有されている感情規則——「このような状況にあれば、このような感情を経験するだろう」という感情の文化的な規則・文法——を運用しながら、状況に適合的な感情の「名前」を自己や他者に与え、文化的に構築された感情を生きている（Coulter 1979, 岡原 1987）。子どもたちが公園で笑って遊んでいれば「楽しい」という語で、次の日に大事な面接があつて眠れない自分に気づけば「緊張」という語で理解する。その限りでは、状況を構成するその他の概念との連関のなかで自己や他者の状態に理解可能な感情の名前を与えることなしには、感情をそれとして経験することはできないようにも思われる。

しかし、そうなのだろうか。私たちは全く反対に、人生のなかでときにこうした感情語のラベリングを、感情それ自体の〈ことば〉が裏切るような経験を生きることがあるように思われる。悲しくないのに涙がでてしまう。嬉しい状況のはずなのに身体が固まる。別人なのに父親に向けていた苦手意識を向けてしまう。痛いはずなのに安心する（澤田 2018）。

こうした他者ばかりでなく、本人にとっても不可解なかたちでその身体に生きられる感情を、本稿では、「名前のない感情」とさしあたり呼ぶことにする¹。「名前のない感情」は、構築主義的な発想からすれば、「名前のある」感情として言語的に理解されているわけではないのだから、感情と呼ぶことはできないと位置づけられるかもしれない。

しかし、「名前のある」感情もまた、私たちは「とりあえず」そう呼んでいるにすぎないのではないだろうか。感情が生きられるままに、生きようとするままに受けとるのであれば、感情は主体の置かれている状況のなかで、それぞれに個別の物語性——〈ことば〉——をもったものとして生きられている。同じ「悲しい」という名前でとりあえず括られる感情であっ

でも、あの日に私が生きた悲しみと、その日にあなたが生きた悲しみは、それぞれに別の「名前」があってもよいはずの、この世界で一回限りの取り替えのきかない悲しみだったのである。その限りでは、最もその広い範囲で考えれば、本来すべての感情が、「名前のない感情」だということもできる。いずれにせよ、「名前のない感情」という名前を与えなければ、なかったことにされてしまうような経験が、感情の声があるように思われるのである。その〈声／ことば〉を聴くことは可能だろうか。

本稿では、感情社会学におけるアートベース・リサーチという方法にその可能性を託してみたい。感情の〈声／ことば〉は通常の意味で聴くことができるものではない。それは私たちが知っている「現実を構築する発話可能な言語」とは異なる。身体を通じて生きられる（異形／異邦の）〈ことば〉として、しかし現実について何かを誰かに語る〈ことば〉としてある。だとすれば、そもそもそれを聴くとはいかなることなのか。それが可能となるための条件とは何であるのか。以下ではまず、感情社会学への ABR の導入を牽引する岡原正幸の思索を頼りに、そこで問われ、目指されてきたもののなかに手がかりを見いだしてみよう。そのうえで、「名前のない感情」という経験をひとつの宛先にしながら、構築主義的な感情社会学と ABR による感情社会学が、そこに生きられている〈声／ことば〉とどのように向きあいうのか、そして誰かとともにそれを聴くという可能性の地平が、この世界で私たちが感情を生きているということをめぐって何を示唆し、問いかけているのかを考えてみたい。

2. 感情公共性とアートベース・リサーチ

アートは、作品をつくることや表現をすることを通じて何をしているのか。もしかするとそのひとつには、感情が私たちの身体を通じて生きようとする〈声／ことば〉を聴こうとしているのではないか。

岡原は、次のように述べている。

人間への全体的な接近といった作業は、過去二百年むしろアートに任されていたものである。文学、小説、ドラマ、詩、絵画や彫刻、ダンスや演劇、音楽、写真や映画など。アートは、人間をつねに全体として理解し伝えようとしてきた作業だといえる。その財産を社会学が利用しようと考えたとしても不思議はない。……さらにその上、現実とは構成されるものであるという、構築主義的な哲学は「事実」と「フィクション」の境界さえ無効にしているのだ。事実を扱う科学、フィクションを創作するアート、という区分も意味がなくなるわけだ。……その中で、アートを利用する研究、ABR の試みがすでに 1990 年代には登場することになった。……他者の経験への共感とは、人間の生の深遠な意味形式にとっての必要条件だが、それをアートはもたらしてくれるのだ。(岡原 2013a)

アートは、作品（フィクション）をつくることを通じて、表現することを通じて、フィクションではないものを、フィクションとしては突き放せないものを生き、そこに人間の生の深遠な意味形式を聴こうとする。このことはひるがえって、私たちに次のことを問いかける。私たちの生きる現実とは社会的に構築された（一種の）フィクションだとしても、そのなかで私たちが感情を生きることもまた、フィクションなのだろうか、と。

構築主義的な感情社会学が厳しく批判されたのは、まさにこの問いに理論的には首肯した点にある。あくまで「現実」の構築過程の一部として特定の名前をもつ感情が構築されると考えたわけである。しかし、すでに述べたように、感情は私たちの身体を通じて現実構築（フィクション）に抵抗する何かとして生きられることがある。

けれども、岡原がより深刻な問題とみなしていたのは、そのような感情

の「構築性」（そこに働く文化的規則）のみを語る感情社会学の知が“感情は構築されたものにすぎない”というかたちで、人びとに自分や他者の生きる感情から距離をとったり、文化的規則に応じた管理行為を促していく言説となることにあった。彼は次のように述べている。

告白しよう、感情社会学は詐欺的商法である。感情の社会学だと宣伝しつつ、感情そのものは扱われないのだ。感情をめぐる構成的あるいは規則的な要素、たとえば「感情文化」が語られるだけだ。……そしてこともあろうに、ニュアンスは異なれど、それら文化モデルと個々人の感情の実体験は一致しないことが臆面もなく宣言される。だったらそれはなんなんだ！……個々人の生きられた経験や感情のかわりに、感情の集成的な文化モデルを据える。それは知的営為の水準でなされた感情管理そのものではないか。感情管理の媒体として知は構成的な作用をもつものだから、抽象的に論理的に組み立てられた感情社会学それ自体が現実における感情管理を促す道具にならないはずはない。もし感情管理という事態を否定的に捉え、それを批判する知として感情社会学があるのなら、そこには大いなる裏切りの可能性さえある。（岡原 1998: 1-2）

「感情そのもの」——私たちの言葉でいえば、感情が主体の身体を通じて生きる〈声／ことば〉——を回避し、文化的規則しか扱わない構築主義的な感情社会学は、彼にとって自分や他者の生きる感情に「社会によってそう思わされているだけ、仕向けられているだけだ」という冷ややかなまなざしを向け、その生の切実さから逃げてきたのではないかという（感情社会学者としての）自分自身への深い疑いと嫌悪に苛まれていくものだった（岡原 2008: 24）。その批判の強さは、「感情自体を感情社会学的に相対化することによって手にしてきた自分の心の静寂さが無力」であったとい

う彼自身の生活史上の出来事に発する実存に関わる意味に裏付けられている（岡原 2017: 135）。

この問題との向き合い方は、したがって理論的な水準のみで解決されるのではなく、芋づる式に、ではそのような「感情社会学をする自分」とは何者であるのかと問い、社会（科）学者として自らの主観性や感情を排し、忌避するように「制度的に構築されてしまった『僕』『岡原正幸』『社会学者』の脱・再構築をめざ」すものでなければならなかった（岡原 2009）。いわば、「感情社会学する」ということを人間のひとつの行為として捉えたうえでの実践的な水準の問題の乗り越えがそれ以外の理論的、実存的な問題を包含していく必然的に唯一の道だったのである。

彼はここから構築主義を手放すのではなく、「よりよい」構築主義の実践の模索へと向かう²。「ホモアフェクトスの転回」と呼ばれるこの態度決定は、いわば悪しき構築主義から、「感情が社会的に構築される」として、そのことを受動的あるいはシニカルに受けとめてしまうのではなく、構築されることそれ自体を自分自身の生として受けとり、そのことを自分の生として生き抜く」実践の模索として示される。具体的には、互いの感情に立ち会う他者たちとともになされる技法として、「感情の構築性を了解した上で、この構築された感情を現に経験している、この主体への敬意が示される」、そのような構築ゆえの真実性が立ち上がる空間、「感情公共性」の場の模索である（岡原 2008: 27-8）。

そこでは、アートという言葉はでてこないが、それはまさに感情の〈声／ことば〉を聴こうとする空間としてあるように思われる。「感情公共性」の原風景として参照される、障害をもつ子と親の会や障害者の自立生活運動の場面が次のように述べられている。

そこに集う個々人の主観や感情は決して疎かにされることはなく、むしろまず、どのように感じているのかが語りだされる……。ひとり

ひとりの感情，そこが出発点であるということ，その感情にみんなが向き合い，それがもし苦痛だったり，重く感じられるなら，どのようにその感情とつきあえばいいのか，場合によっては感情の変更さえもたらされる，……そこに集うひとたちが語られる感情の物語に耳と体を傾け，その脈動を聞き取ろうとし，そこに語るひとの生を見いだそうと努力する……。 （岡原 2008: 28-9）

こうした感情公共性の空間では，主体による状況の定義，あるいはその文脈適合性に従属するかたちでの感情の定義づけ（構築）ではなく，むしろ何よりすでに生きられている感情が出発点に置かれ，感情が生きようと発する声やその脈動のようなものが聞き取ろうとされる（岡原 2013b: 93-4）。批判的に徹底された「よりよい」構築主義の実践は，生きられているというただそれだけの資格において，すべての存在に，名前のない感情にさえ敬意をもつ相互行為の場としてある。

そのように受けとめるとき，のちに見出される ABR の実践は，「学問的な空間自体が感情公共性になりえる可能性」（岡原 2013b: 106）を模索する岡原にとって，質的研究の方法論ということ以上に，そのものそれ自体が「感情公共性」を生成する方法として見出されていったのだと考えなければならない（Research-Based Art ／調査に基づくアートではなく，Arts-Based Research ／アートに基づく調査を彼が選ぶのは，アートが自己や他者の感情への立ち会いや理解に補助的に資するという実感があるからだろう）。少なくとも，感情社会学の文脈における ABR は，感情公共的な実践としてそれがあることがなければ，理論的にも実存的にも意味をなさない（形骸化する）経緯と構造をもつのだといえる。

しかしその後，「感情公共性」は目指すべきものとして繰り返し示されながらも，岡原はそれを実現する手立てをもてないままにいたようにみえる。それはおそらく，よりよい構築主義として見出された感情公共性の場

が、すでに「構築」の次元とは異なるものによって成り立っているということに関わるように思われる。そもそも、なぜ集まり、感情に向き合われたのか、なぜ伝え、ともに生きようとするのか、この問いに答えることは「構築」の発想にはない（構築の発想にあるのは「あなたは何が言いたいのか」、である）。感情公共性の場面にあるのは、「感情を聴く」ということである。聴くということは、少なくともそこに（聴くというかたちで応えるべき何かとしてすでに）聴こえているものがあるということ、あるいは聴こうとしなければ聴こえなくなってしまうものがあるということである。それは人の声や語りであり、声や語りを通じて語る別の声であるかもしれない。感情の〈声／ことば〉は通常は聴くことができるものとしては認識されていない。けれども、マイノリティ性をもつ人々の生活や運動のなかではその必要性からすでに「聴く」というかたちで応答すべき（呼びかけとしての）感情の声がそこにあることが聴かれているのだといえる。マイノリティ性をもつ人々はまさにマジョリティによる現実の「構築」のなかでは名前をもたないような感情を生きなければならなかったともいえるからである。

そうであるなら、必ずしもマイノリティ性をもたない人々にとっては、アートの実践こそが、それを通じて、「感情を聴く」というかたちで立ち会い、応答すべき〈声／ことば〉がそこに生きられて存在する感情公共性の次元へと連れ出していくのだといえるように思われる。

それはアートがすでに、構築の次元では聴こえない、感情の〈声／ことば〉を聴こうとするためにあるからではないか。だからそれは、聴こうとするために表現する、ということでもある。しかし、なぜアートを通じた実践がそれを可能にするのだろうか。私たちはこれを、「名前のない感情」をめぐる構築主義的な向き合い方との比較に見定めなければならない。

3. 「名前のない感情」

日常的な言語実践を生きる私たちにとって、「名前のない感情」は、現実の構成論理にしたがって、名前を与えて理解する対象ではあっても、それ自体が「聴く」というかたちで応答すべき〈声／ことば〉をもつものとして理解され、向き合われることは自分のものであれ、他者のものであれ、かなり難しいことのように思われる。

もちろん、日常的な相互行為のなかで、本人にとっても不可解な「名前のない感情」が、状況の定義を揺るがす問題として焦点化され、ある感情として聴かれていく場面はある。例えば、ある学生は私が構築主義的な感情社会学に関する講義をした際の感想に次のような経験を書いている。

私は、社会的文脈に感情がついていきません。泣いたりモヤモヤしたりするのに、それが何故なのかわからなくてずっと苦労してきた気がします。例えば、恋人に「もう好きじゃないから別れよう」と泣きながら言うと、彼に「なぜもう好きじゃなくなったの？なぜ好きじゃなくなったのに泣いているの？」と聞かれました。私が自分でもわからなくて答えられないでいると（でも「好きじゃなくなった気持ち」は確実）、彼に「別れるのが悲しくて泣いているなら別れる理由はない」と受け取られ、結局別れることがそのときはできませんでした。彼にも「自分の感情の理由がわからないなんて、ちょっと人としておかしいよ。そんな人と会ったことがない」と言われ、いまだに軽くトラウマです。……自分の感情を文脈から理解することはそんなに大切で、それができないことはそんなにおかしいことなののでしょうか？（澤田 2019:13-4）

感情をめぐる言語使用の規則からすれば、「別れ」を告げられた側の男性が泣くのは理解しやすいが、別れを告げる側が泣く状況は「別れ話」と

いう状況の定義に必ずしもそぐわない不可解さをとまなう。だから、女性自身もなぜ自分が泣いているのかをうまく説明も理解もできない。

こうした状況の定義が揺らぐ局面で、別れたくない男性側が、女性側の涙の意味（名前のない感情）に寄り添うのではなく、「本当は別れたくなくて、悲しくて泣いてるんだよね」とその涙を定義し、「別れ話」という状況の定義そのものを覆そうとすることは想像できる一場面だろう。そして、女性は別れたいのに別れることができないという結果にもなる（澤田 2024: 49）。

このとき、「名前のない感情」としての涙は、そのままそれ自体として尊重され、理解される余地は、構築主義的な発想によっては日常生活者にもたらされることはない。あるいは、「わからない」「おかしい」という現実を構築されることになる。そして「名前はない」が、しかし女性の身体に「生きられた」感情の意味／声は、状況の定義に塗りつぶされることになる。感情公共性の場であれば、生きられているという資格において、「名前のない感情」はひとつの意味ある語りとして扱われ、向き合われ、ともにあろうとするために、そこにある〈声／ことば〉が聴きとろうとされるかもしれない。しかし、本人にもそれがわからないままに流される涙、名前のない感情の〈ことば〉は、通常の意味では聴くことができない。そう思われる。ただそばにること、『感情する』ひとに向けて、立ち会うことで、隣にいてことで、つまり離れたり遠ざかったりしないこと」がめざされるかもしれない（岡原 2008: 29）。だがそうあり続けることはおそらく、誰にでも、誰に対してもできることではない。

ここには、どこかで、それが聴くことができる可能性にひらかれていること、あるいはそこにいることしかできないが、何かが声としてあるということ、その人が、ではなく、その人を通して語られていることがあるという感覚を必要とするように思われる。

もうひとつの場面をひきたい。東日本大震災で夫を亡くした女性が、そ

の6年後に夫に向けて綴った手紙である（金菱 2017: 185–207）。

おはよう、パパ

声には出さずに天井を見る。朝、アラームが鳴る前に目をさますようになったのは、最愛の夫であるあなたを失ってから。

私は、一気に歳をとってしまったような気がするよ。

ゆっくりスマホに手をのばしながらあなたを思うと、少しだけ、涙で目がうるむ。

毎朝そこから一日が始まる。

目がさめて、となりにあなたがいない現実を思い知る、朝が一番つらい時間。

（中略）

平日だったので、娘は会社に行かせていた。孤独だ、と思った。

玄関に立ったまま頭の中が白く霞んだ。そうしたら、ふいに、口から笑い声が出た。仏壇の前に行き、座りこんでなぜだかしばらく笑いが止まらなくなった。

まったく可笑しくなんてないし、笑いたくなんてないのに、涙を流しながら、自分で止められない笑いがとても怖かった。

（金菱 2018: 139）

その経験を「喪失」という言葉において私たちは理解できてしまうのかもしれない。しかし、「まったく可笑しくなんてないし、笑いたくなんてない」という彼女の状況の定義を裏切るようにして生きられる笑いは、そのようなわかりやすい理解をどこかゆるさない切実さと取り替え不可能なかけがえなさを伝えているように思える。そして、「自分で止められない笑いがとても怖かった」と述べられているように、彼女にはまるでもう一人の感情という主体＝語り手が身体を通じてあらわれていたかのようにも

みえる。

もしここに「名前のない感情」という存在を認めてよいならば、そこには両義的な響きがあるように思われる。つまり、「名前がない」ゆえに距離がとれず、それにふりまわされるという切実さと、「名前がない」ゆえにはかの誰とも同じではないという取り替え不可能さ、その相反するかのような苦しみとかけがえなさ、である。私たちはしばしば名前のない苦しみにのみ目を向け、「名前」を与えて性急に理解しようとするのだが、名前のない感情に、定型化された「名前」（病名などの場合もある）を与えることは、他方でそこで感情が身体を通じて生きようとした大切な何かをどこか取り替え可能な次元へと見失わせてしまうともいえるかもしれない。

だとすれば、「名前のない感情」を理解するとは、（誤解を恐れずに言えば）「名前を与える」ことではない。少なくともそこが目指されているのではない。しかし、名前のない感情を名前のないままに理解するとは、どういうことでありうるのだろうか。

彼女とその身体がある日の朝に生きたその意味を、私たちはこれ以上うかがい知ることはできない。けれども、少なくとも次のことが確認されてよいように思われる。あの日の彼女にとって、ひとりになった家の玄関でうけとめなければならなかった現実、止められない笑いをもってでしかうけとめることができなかったというそのことがある。このとき、私たちは、そのようなかたちででしかうけとめられない現実がそこにあることへと向き直す。彼女の身体を通じて何かが語られている。ごく単純にそう思うからである。

私たちのこの態度はすでに、先の別れ話の例での男性側のような、「構築」的な態度ではない。それはあくまで第三者的な立場で、手紙に書かれた経験を読んでいるからなのかもしれない。しかし逆に言えば、第三者的な立場であるにもかかわらず、私たちがそこにある名前のない感情に応えて、それが受けとめようとしている現実に向き直しているということは、

もうすでにひとつの〈声／ことば〉が聴かれ、想像的にであれ、そこに立ち会おうとしているからであるように思われる。そこで聴かれているのは、「現実を構築する言語」ではなく、その現実を人間がうけとめようとして身体に生きられる感情の〈ことば〉である。私たちは常に現実の推移に呼応しながら、それをうけとめる〈ことば〉を身体的な生の形の変化を通じて生きている。「止められない笑い」が何を意味しているのかは私たちには知ることができないとしても、ここで重要なのは、それを私たちは本来何かを語る〈ことば〉として聴くことができることにひらかれているということである。

けれども、ひらかれてあるはずなのに、先の別れ話の例や感情公共性への希求が逆説的に物語るように、普段私たちはそこに感情の〈声／ことば〉が半ば聴こえながら、それから耳を塞がれてしまうように、あくまで状況の文脈との適否や理解可能な名前や管理を与えるべき対象という水準で関わろうとしてしまう（自分自身の感情に対してさえ）。名前のない感情の〈声／ことば〉を聴くとは、だとすればそうした建前や合理性の水準から逃れてあることが必要なのだと言えるように思われる。

そして、私たちはすでにそうした感情をめぐる日常的な言語実践における制約から私たち自身が解かれて、自分や他者の身体に生きられる感情の〈声／ことば〉を聴く営みにとどまることがゆるされる空間を知っている。アートを用いる実践、あるいはアートを媒介に自己や他者の意味世界に関わろうとする空間である。そして、それが同時に、「感情公共性」として生成される空間である。

4. 感情の〈声／ことば〉を聴く

私たちはここまで、感情の〈声／ことば〉を聴くことをめぐって、感情社会学では何が目指され、そのことに関して「聴く」というかたちでの応答可能性を支える条件と、そこに垣間見えてくるアートを用いる感情社会

学の可能性を探ってきた。

本稿の後編（Ⅱ／別稿）では、アートベースでの感情社会学の具体的な実践の経験が事例として考察されることになる。そのため、ここではそれとの接続として、私たちが日常的な言語実践の地平では自分や他者の生きる感情の〈ことば〉から耳を塞がれてしまう制約を、アートベースでの実践が幾重にもわたって解除し、〈ことば〉の地平へと連れ出していくことを本稿から見通せる限り考えてみよう。

まず、アートベースでの、とくに非言語的な作品や表現の形式——絵や彫刻、身体詩など——を生きていることがゆるされる場であることとして最も決定的なのが、日常的な言語実践の地平では（名前のない）感情をめぐる問われ、また本人も囚われてしまう「善悪」や「正誤」、「因果関係」の是非（感情規則と言い換えてもよい）が問われないかたちでそれをつくること、また表現することができるということにある（cf. 最相 2014）。そのことは作品内のみならず、それをつくる過程においても自分や他者の感情に対して善悪や正誤、因果関係を問うような「構築」的な構えをとらないコミュニケーションを可能にするかもしれない。そもそも私たちの感情はこれらの是非を無視して主体をふりまわすように生きられてしまうのであり、アートはそうした感情の〈ことば〉を聴くために日常的な言語実践にやどる一連の是非を問う体制を解除している。

またアートを用いる方法、とくに演劇的な手法では、他者の身体、あるいは自分の身体を演じて生きることにはひらかれている。例えば、その身体を持ち主が、ある出来事に至るまでの物語的な状況をふまえて、その出来事や現実をうけとめようとした際に生きた感情的な態勢（表情や涙、身構えなどの生の形）を実際につくること、生きることを通じて、それが何を物語っているのか、そこに生きられていた〈ことば〉を追体験的に聴こうとすることがゆるされている（小倉 2014）。例えば、ある形でうずくまってみることでしか、あるいはある角度で視線を送ってみることでしか、そ

の身体がどのようにその状況をうけとめようとし、向きあって生きようとしたのか、その〈ことば〉は聴くことはできない。それは逆に、その態勢のなかでうけとめられている現実、その態勢をもってほかにうけとめられなかった現実の意味を知ろうとすることでもあるだろう。そして、そのうけとめ方の意味はそこで生きられるままに、身体に聴かれるままに言葉にすれば、比喩的なものであっても、それがそのような比喩性のなかでうけとめられたことそれ自体の必然性が切実な意味をもつものとして尊重されるだろう（澤田 2014）。

さらにフィクションを用いることもまた、感情の〈ことば〉を聴くためにあるといえる。全く架空の状況をつくることではじめて、聴くことが可能になるような感情の〈ことば〉があるように思われる。先に引用した亡き人への手紙は、決してフィクションとして位置づけられるものではない。しかし、亡き人に手紙を書くという状況のなかで、本人にも十分には聴こえていなかった、あるいは思ってもみなかった〈ことば〉が綴られていくこともありえただろう。フィクションはそこにフィクションでないものを、本人にさえうまく言葉にできなかったことを（そこに身を置く身体を通じて）聴かせてくれるのである。「もしこうだったら」という If に真実がやどるのだといえるように思われる。

そして、アートをベースにしながらも、感情の〈ことば〉を聴くために、そこにあった個別の物語性を、インタビューを用いながら丹念に重層的に重ねていくことが可能である。ある人の流す涙の意味を理解するとは、ほかならぬその人の人生のなかで、そのとき、涙というかたちでしか生きることができなかった〈ことば〉を理解し、ひとつの語りとして聴こうとすることだからである。

このように感情の〈声／ことば〉を聴くという感情社会学的課題から、アートベース・リサーチを整理するとき、それが同時に感情公共性の空間

を支える条件にもなっていることがわかるように思われる。実際に感情の〈声／ことば〉が聴こえるかどうかよりも、少なくともそこに聴こうとしなければならないもの（呼びかけ）があるというかたちでの応答に私たちをとどまらせてくれるのである（cf. 澤田 2023）。そして、その〈声／ことば〉を聴こうとすれば聴けるかもしれないという可能性にもひらかれている。それは一対一のような関係でもそうだし、あらゆる人間関係にあるべきものである。

そこには「名前のない感情」が、名前のないままに聴かれ、伝えられ、ともに生きようとされる空間がある。あるいは、そうした時間と思いが、ひとつの詩的な名前として与えられるのだと言ってもよいのかもしれない。

註

¹ 「名前のない感情」は、本稿でみる事例以外にもさまざまな状況で経験される。例えば、「名付けえない」感情というかたちであれば、外傷的なものも含まれるし、より単純にその文化にまだ「名前」をもって認められていない感情経験もあるだろう（とくに社会的なマイノリティ性をもつ当事者の感情経験は、多数派の言語状況のなかに位置をもちえない）。あるいは、社会規範との関係で自分のなかにその感情があることを認められない場合や文化資本として自分の感情を記述する言語資源の多寡によっても、自分の感情がわからないということや感情が見失われることは起こりうる。「名前のない感情」には、いくつかのパターンがあるとはいえ、ここでは個別の事情を超えてあらかじめ限定することはしない。本稿で扱う事例もあくまでそのなかのひとつであり、「名前」を与えられ、理解されることへの感情の抵抗としてさえる。

² それはすでに感情の構築性に基づく感情労働論などの社会学的研究が広く展開され、確かに私たちの感情生活の一面を的確に捉えており、これを棄却することはできなかったからである。「僕自身は感情社会学を全否定するつもりは毛頭ない。感情社会学が見せてきた生へのスタンスに違和感を感じていただけだ。だったらつぎに、感情社会学的認識を生を糧にする道筋を考えていけばよい」（岡原 2008: 25）。

参考文献

- Coulter, Jeff, 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: Macmillan. （西阪仰訳, 1998, 『心の社会的構成——ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社.）
- 金菱清, 2017, 『悲愛——あの日のあなたへ手紙をつづる』新曜社.
- , 2018, 「ライティング・歴史の展開——オーラル・歴史の敗北宣言」『フォーラム現代社会学』17: 137–48.
- 宮下阿子, 2016, 「摂食障害における『くうこと』と『くうもの』」『支援』Vol.6: 160–6.
- 岡原正幸, 1987, 「感情経験の社会的理解」『社会学評論』38(3): 321–35.
- , 1998, 『ホモ・アフェクトス——感情社会学的に自己表現する』世界思想社.
- , 2008, 「ホモアフェクトスの転回——感情社会学における, 構築されるものされざるもの, を越えて」『三田社会学』13: 17–34.
- , 2009, 「僕の研究紹介」team okawiki（岡原正幸研究会 HP: <https://wikiwiki.jp/teamoka/%E5%B2%A1%E5%8E%9F%E6%AD%A3%E5%B9%B8>）（2025年3月6日最終閲覧）
- , 2013a, 「パフォーマティブ社会学宣言」『NiPAF2013 カタログ』NiPAF.
- , 2013b, 『感情資本主義に生まれて——感情と身体の新たな地平を模索する』慶應義塾出版会.
- , 2017, 「アートベース・リサーチ——なぞる／癒す／パフォーマンス」『法学研究』Vol.90, No.1: 119–47.
- 岡原正幸編, 2020, 『アート・ライフ・社会学——エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋書房.
- 小倉康嗣, 2014, 「生きられた経験へ——社会学を「生きる」ために」岡原

正幸編『感情を生きる——パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾出版会, 14–36.

最相葉月, 2014, 『セラピスト』新潮社.

澤田唯人, 2014, 「隠喩的対話という技法——『語り得なさ』をめぐる当事者実践の社会学」『三田社会学』19: 34–54, 三田社会学会

——, 2018, 「人の気持ちはどこからくるの? 感情・共感のしくみ」綾屋紗月編『ソーシャル・マジョリティ研究——コミュニケーション学の共同創造』金子書房, 23–61.

——, 2019, 「社会学 I」第 3 回（慶應義塾大学文学部開講）授業資料.

——, 2023, 「傷痕と出会いの隔時性——呼びかけの痕跡と他者の現れをめぐる事例から」『現象学と社会科学』6: 23–44.

——, 2024, 「感情と行為の社会学——自傷行為という語りの物語的理解をめぐって」博士学位請求論文, 2024 年度慶應義塾大学社会学研究科提出.